

月刊

2011

2
月号

みんぱく

特集

鬼はソト、鬼はウチ

鬼と常識 笹原 亮二

鬼の図像をめぐる 小松 和彦

鬼のつく苗字 村上 政市

日本の昔ばなしの鬼 小澤 俊夫

鬼神の哀しさ 松崎 遼子

鬼子母神と神義論 杉本 良男

ルーマニアのなまはげ 新免 光比呂

夏のすさまじい雷雨、冬の容赦ない空つ風。私が住む北関東の農村地帯は、しばしばこのように手強い洗礼を受ける。人々の言葉は荒く、声も大きい。大自然の威力の前では、まだつましいとさえ言えるだろう。

長塚節の小説『土』は、吹きすさぶ西風が物語の扉を押しあけ、一〇〇年前の貧しい農村社会のドラマが開始される。今日、その精緻な表現により、民俗誌、農村生活誌としての評価を高めている作品だが、舞台は同じ北関東である。

ところが『土』の感銘を新たにしていた昨年、私は奇蹟的とも言っべき素晴らしい本に出会うことになった。『一〇〇年前の女の子』。著者の船曳由美さんは令名高い編集者であるが、その人が一〇〇年前に北関東の高松村（栃木県足利市）に生まれた少女の物語を書いた。少女は寺崎テイさん、著者のお母さん。高松は私の隣り村、いわば同じ文化圏である。船曳さんが、にわかになんか存在になった。

物語は実に鮮やかであった。実母を知らずに育った少女は、つらい養女時代を持ちながらも健気で、未来を切り開く強い力を持っていた。そして背景となる明治、大正期の農村の年中行事や風俗世相が克明に生き生きと描き出される。私は少女の経

プロフィール
1950年群馬県に生まれる。柳田国男研究をベースに日本の地名やアイヌ、沖縄文化、東毛（群馬東部）地域の民俗研究をおこなう傍ら、文学、美術に幅広く関心をもつ。共著「柳田国男をよむ」など。現在、柳田国男研究会会員。



生き生きした民俗誌

川島 健二

験が、四〇年後の少年の私の経験に親しく通じ合っているのを知り、懐かしい共感を覚えた。

たとえば、少女の家では正月三日は餅を食べない。神様にお供えするの餅ではなくウドン。私の家も同様であった。いわゆる「餅なし正月」である。こうした家例は北関東に限らず広く日本に分布するが、ウドンの他、ソバ、芋の例も多く、畑作物の儀礼食としての重要性を象徴している。船曳さんがお母さんの話を入念に聴き、また文献に丁寧に当たり、小さな民俗事象に目を凝らしていたことに心底驚かされた。奇蹟的に感じられたのは、一少女の物語がそのまま見事な農村生活誌に重なり、民俗世界の豊かさを深々としたりアリティで伝えていたからである。

忘れ難いシーンがある。村の瓦屋が仕事を終え一杯やると、荷車の上で寝てしまう。すると牛が荷車を曳いて家まで連れて帰る。私も同様の農夫を見たことがあった。今では幻のような光景が確かに存在していたのである。船曳さんと船曳さんのお母さんが紡ぎ出した世界は、歴史のざわめきの底にある神と人と自然が身近に響き合っていた世界である。私たちの過去を未来への糧とすべく、私たちが追記——テイさんは旧臘一〇一歳の天寿を全うされた。

月刊
みんぱく
2月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
生き生きした民俗誌 川島 健二</p> <p>2 特集 鬼はソト、鬼はウチ</p> <p>3 鬼と常識 笹原 亮二</p> <p>4 鬼の図像をめぐる 小松 和彦</p> <p>5 鬼のつく苗字 村上 政市</p> <p>6 日本の昔ばなしの鬼 小澤 俊夫</p> <p>7 鬼神の哀しさ 松崎 遼子</p> <p>8 鬼子母神と神義論 杉本 良男</p> <p>9 ルーマニアのなまはげ 新免 光比呂</p> <p>10 研究フォーラム
民博東京講演会
「世界の結婚事情
——セネガル、中国、フランスから考える」
野林 厚志</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
鉱山跡に立ちあらわれた鬼の殿堂
日本の鬼の交流博物館
久保 正敏</p> <p>15 みんぱく 私の逸品
東北の蓑と前衛のデザイン
アンヌ・ゴッソ</p> <p>16 散策と思索の径
古民家という宇宙
杉村 和彦</p> <p>18 多文化をささえる人びと
大阪の民族学級
——在日の子どもたちとともに歩んだ60年
郭 政義</p> <p>20 歳時世相篇
中国・壮族の春節
塚田 誠之</p> <p>22 フィールドで考える
メロンなかまをさがして
田中 克典</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

特集

鬼はソト、鬼はウチ

土鈴 (鬼)
標本番号 H0143249

仮面 (老鬼)
標本番号 H0013464

節分の豆まきで唱えることばは「鬼はソト、福はウチ」。鬼は外に追いやられる存在だ。ルーツのひとつは追儺、つまり鬼やらいである。これは中国伝来で、宮中行事にとりいれられた。仏教寺院でも修正会や修二会で追儺がおこなわれる。

ふつう、鬼は邪悪で恐ろしく、忌むべきとかんがえられている。そこで新年や節分には悪鬼を追い払い、清浄な状態を回復し、時間をリセットする。ところが、鬼は邪悪どころか、生命力にあふれた存在とみなされる行事がある。

また「鬼はウチ」とばかり、家々で歓迎されることすらある。奥三河の花祭や国東の修正鬼会がその実例である。

いっぽう、鬼のイメージは「百鬼夜行」の絵巻のように多様な「化け物」を生み出してきた。古道具の妖怪はその一例である。金棒を手にもつ赤鬼・青鬼に固定化されてはいなかったのである。昔ばなしの鬼も鬼が島だけでなく、山や穴のなかにも住んでいる。

日本人はどうも鬼に愛着があるらしく、鬼の博物館がある。おどろくべきことに「世界鬼学会」という学術団体まで存在し、「鬼姓さん 大集合」というイベントを打っている。

鬼は日本以外でも身近な存在のようだ。韓国の「鬼神」は不幸の原因とかんがえられてきたが、若者は鬼神に同情を寄せているらしい。

インド伝来の鬼子母神も食人鬼であったが、仏陀に帰依して中央アジア、中国、日本などでは子どもや妊婦の守り神となった。

ヨーロッパに目を転じると、真冬に鬼があらわれる。ルーマニアのマラムレシュ地方では若者がそれを演じる。恐ろしい仮面をかぶった異形の姿は秋田のなまはげを想起させるが、追い払われるところは追儺に似ている。

ひとくちに鬼といってもじつは善悪や愛憎、島や山などの心理やイメージが複雑に交錯しているのである。(中牧 弘允 民博 民族文化研究部)



土鈴 (鬼よろず)
標本番号 H0142632

鬼と常識

笹原 亮二 民博 民族文化研究部

「鬼は外、福は内」は、節分の豆まきの際のお馴染みのフレーズである。角が突き出た憤怒顔で金棒をもった姿はいかにも恐ろしげで、昔ばなしのなかでもしばしば人を襲ったり、物を盗んだりしている。それを考えると、鬼が豆まきで追い払われるのも、さもありなんという気がしてくる。こうした「鬼は悪者」という理解はごく当たり前の常識として、誰もが納得するところであろう。しかし、全国各地でおこなわれている民俗芸能に目を向けると、事情は少々違ってくる。鬼はどうも、悪者で恐ろしいだけの存在ではないようなのである。

湯立の神楽

奥三河の各地では、例年一月から正月にかけて、花祭とよばれる湯立の神楽がおこなわれる。そこでは舞庭に築いた葦の周囲で夜通しさまざまな舞が演じられるが、ハイライトは山見鬼・神鬼・朝鬼の出現である。山見鬼は、竈を山に見立て、鉞で割る仕草をするが、山を割って土地に新しい命を吹き込むとされる。神鬼は、菰の上で踏み鎮める反問の動作をおこなう。朝鬼は、天井に吊した蜂の巣とよばれる作り物を木槌で叩き落とし、なかの縁起物を入びとの頭上に降らせる。花祭の鬼はいずれ

も人びとに福をもたらす肯定的な存在なのである。

授けてまわる

花祭以外にも、鬼が家々を巡って家内安全・無病息災の加持祈禱をおこなう大分県国東半島の修正鬼会、鬼が桜の造花をかざして五穀豊穰を祈願する、「ダダ」とよばれる足踏みをおこなう兵庫県神戸市の近江寺鬼追い、鬼が厄除けの痰切り飴を入びとに授けて走り回る愛知県豊橋市の鬼祭など、人びとに福をもたらす鬼が登場する民俗芸能は意外に多い。更に、大晦日から元日にかけて、家々

を巡って子どもたちを脅し諷めてまわる秋田県の男鹿地方のなまはげや、大晦日に子どもたちを諷めつつ、歌の褒美に「年玉」とよばれる鏡餅を授けてまわる鹿児島県甑島のとしどんなど、鬼のような恐ろしげな異形の面相をした訪れものも含めると、悪者とはいえない鬼の数は一層増加する。とにかく、鬼は悪者とは限らないのである。

鬼からの問い

それでは、鬼は何者か。各地の民俗芸能を見る限り、鬼によってさまざまなとしかいようがないが、確かなのは「鬼は悪者」という「常識」的理解ではまったく不十分ということであろう。常識は必ずしも正しいとは限らない。何かというと「市民感覚」という常識の重要性や正当性が声高に叫ばれる昨今だからこそ、常識を改めて吟味してみる必要があるのではないか。民俗芸能の鬼はそんな問いを突きつけてくる。能天気になまはげをぶつけている場合ではない。



奥三河の花祭 (愛知県東栄町)



成仏寺・岩戸寺の修正鬼会 (大分県国東市)



安久美神戸神明社の鬼祭 (愛知県豊橋市)



男鹿のなまはげ (秋田県男鹿市)

鬼の凶像をめぐる

小松和彦 国際日本文化研究センター教授

「鬼」という語を聞いたならば、どのようなイメージを抱くだろうか。おそらく、頭には角をもち、口からは牙のぞき、手には金棒をもった、ふんどし姿の赤とか黒、青といった肌の色をした、筋骨たくましい、人間に似た生き物を思い浮かべるのはなからうか。子どもたちが楽しむ絵本などに登場する鬼たちは、ほぼ間違いなく、こうしたイメージにそって描かれている。いいかえれば、現代の日本人は、幼いころから、こうした「鬼」のイメージを絵本や漫画などを通じて刷り込まれて育つわけであるから、このように思い描くのは当然のことなのである。

跳梁した時代

しかしながら、鬼の歴史をさぐってみると、鬼のイメージは最初から先述のように語られていたわけではなく、鬼が跳梁した時代ともいえる平安時代末期から鎌倉時代に編み込まれた『今昔物語集』や『宇治拾遺物語集』『古本説話集』などに語られた鬼は、「さまざまの怖ろしげなる

形」と述べられているように、まことに多様な姿かたちをとっていたことがわかる。例えば、『今昔物語集』に見える、回国の修行僧である義春が熊野の大峯山の奥にわけ入った先で目撃した鬼どもは、ある者は馬の頭、ある者は牛の頭、あるいはまたある者は鳥の首、あるいは鹿の形をしていると語られ、『古本説話集』に見える、西三条右大臣（藤原良相）の若君が女のもとに忍んで行く途中で遭遇した鬼どもは、手三つで足ひとつの者、目ひとつの者などであった、と語られている。

こうした鬼の姿かたちは、もちろん、そのなかには角をもった赤や黒などの肌の色をした筋骨たくましい鬼も含まれてはいたが、今日では、もはや鬼とはいい難い多様な異形の者たちが多数を占めていた。つまり、「百鬼」とは「たくさん鬼」という意味ではなく、むしろ「たくさん異なった種類の異形の者たち」ということなのであった。「百鬼夜行」とは、そうした多様でたくさん異形の者たちが、夜中に、出没することであった。



紀長谷雄に迫る鬼（『長谷雄草紙』より）



大江山に集く鬼たち（『酒吞童子繪巻』より）



鬼に化した器物たち（『付喪神繪詞』より）

※ 4ページ掲載の図版資料はすべて国際日本文化研究センター所蔵



閻魔王の部下の鬼（『地獄草紙繪巻』より）

「化け物」の登場

しかしながら、歴史の流れのなかで、しだいに「百鬼夜行」と「鬼」は区別されるようになる。「角をもった筋骨たくましい者」のみが「鬼」とみなされ、角や色のついた肌をもたずに滑稽な姿かたちをした者は、「鬼」ではない異形の者として、よくするに「化け物」として括り直されていったのである。

室町時代に制作されたと思われる「百鬼夜行絵巻」（近世では「百鬼夜行図」などとよばれていた）がいく

つか伝えられている。そこに描かれているのは、多様な姿かたちをした異形の者たちである。今日流通している狭義の「鬼」に慣れているわたしたちは、これらの異形の者すべてを「鬼」とよぶことに躊躇する。しかし、むかしの人びとの鬼の観念からすれば、それらはいずれも鬼であり、化け物なのである。江戸時代後期には『画図百鬼夜行』と題された、今日の『妖怪図鑑』に相当する冊子が鳥山石燕によって制作された。そこに描かれた異形の者たちはいず

れも、むかしの鬼の観念からすれば、さまざまな鬼であるとともに化け物なのであった。

鬼のイメージ

こうしたことをしつかり頭に入れておけば、すなわち、日本の妖怪観の基層には、多様な鬼の観念があることを了解しておけば、例えば、『土蜘蛛草紙』に描かれた土蜘蛛の妖怪がある場面では鬼に近い姿で出現していることや、棄てられた古道具の精が人間に復讐しようとする物語

を描いた『つくも神繪巻』において、妖怪化した古道具の姿かたちが鬼として描かれていることも不思議ではないことがわかるはずである。むしろ、わたしたちが注意しなければならぬのは、古い書物に記された鬼を、今日広く流通している狭義の「鬼」のイメージで理解してしまうことの危険であろう。むかしの鬼は「百鬼夜行」のイメージ、つまり「化け物」といった意味合いで理解するのが無難なのである。

るということです。

絶対数は、そう多くはなく、もっとも多い「鬼頭」（東海に多い）が約一万人。次いで「鬼沢」（東日本に多い）、「九鬼」（近畿中心）、「鬼塚」（九州中心）などが、それぞれ数千人といわれています。

現在では悪者イメージの強い鬼ですが、本来、日本の鬼は「めぐみ」と「こらしめ」を人びとに与えるという善悪両面をもっていたような気がします。先人たちは、人間の力を超えたものへの畏怖と憧れの気持ちを通して鬼をつくり、楽しみの素材ともしながら、鬼に、社会的存在としての人間の姿を浮かび上がらせる役割を担ってきたのです。

丹羽さんは、「鬼は靈意のある強運の文字だ」と指摘されました。鬼姓さんたち、鬼の強さにあやかりたいと願ったのでしよう。

苗字は地名に由来するものが多いといわれます。鬼の地名は、都市化の進行、大合併のなかで減少の一路です。鬼の苗字、消えることなく末長く継承されることを願っています。

「鬼」鬼熊「鬼目」鬼勝「鬼王」鬼口「鬼」鬼子「鬼首」「鬼追」「鬼極」「百鬼」「百目鬼」鬼という字のつく苗字のほんの一例です。じつに多彩ですね。難読のものも多く、「鬼追」は「きおい」、「鬼極」は「おにぎめ」、「百鬼」は「なりき」「ももき」、「百目鬼」は「どどめき」です。「鬼」は「おに」のほか、「きささぎ」と読んでいる例もあります。先年、わたしどもの博物館が事務局を担当している「世界鬼学会」で、「鬼姓さん 大集合」というイベントを開催しました。修験道の開祖、役小角に仕えた夫婦鬼、前鬼と後鬼の後裔と伝える「五鬼助さん」。わたしの住んでいる福知山市の隣の綾部藩主であった「九鬼さん」の流れをくむ方をはじめ、関西圏の鬼姓さんが多勢集まって下さり、鬼姓への思いやエピソードを語りあい、苗字研究の第一人者であった丹羽基三氏の話を聞きました。笑い拍手の楽しい交流会でした。

鬼のつく姓、「鬼塚」「鬼池」のように頭に鬼のつくもの一四五姓。「九鬼」のように末尾につくもの五〇姓、「五鬼助」のようになかに入るもの一〇姓、あわせて二〇五姓あり

鬼のつく苗字

村上政市

日本の鬼の交流博物館名誉館長

鬼首

日本の昔ばなしの鬼

小澤俊夫 小澤昔ばなし研究所所長

昔ばなしの鬼というと、まずは「桃太郎」の鬼が島征伐を思い浮かべるであろう。そこの特徴は、孤立的な島に鬼が群れをなして住んでいて、大将がいて、人びとから恐れられていて、しかし、桃太郎にいても簡単に負けて、財宝を奪われてしまうことである。ところが、昔ばなしのなかに登場する鬼は多様なので、その様子を紹介してみよう。

鬼の住処

目を広げて見ると、鬼が鳥といながら、鬼がひとり住んでいるらしい話が岩手県にあり、桃太郎に、猿犬、雉のほか、針、牛の糞、臼がきび団子を貰ってついでいき、「さるかに合戦」と同じやり方で鬼を退治する。

鬼が「ねずみの楽土」のように穴のなかに住んでいることもある。岡山の話では、山へ樵に行った爺さんがおむすびを食べようとすると、おむすびが転がり落ち、婆さんが追っていくと、おむすびは大きな穴に入る。婆さんがおむすびを追って穴に入ると、鬼が大勢集まって、酒を飲んだり、

ご馳走を食べたりして騒いでいる。鬼たちは婆さんを飯炊きに使い、仕事に出かけるときに、杓子を与え、「米を二、三粒釜に入れて、この杓子でまぜたら飯がいつばい炊ける」という。婆さんは鬼の留守にその杓子をもって爺さんのところへ帰り、杓子でご飯を炊いて暮らしたという。これは、「一寸法師」に出てくる鬼がもっている打ち出の小槌の類であろう。福岡の同型の話では、青鬼、赤鬼が酒盛りをしていたという。グリム童話の「白雪姫」も、「雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い」とその容姿が語られる。昔ばなしの語り口には

諸民族のあいだで共通性が強いのだが、ここでは色に共通性がみられる。

水を支配する

田んぼの水を支配する鬼もいる。岩手県の「鬼婿入り」では、田に水が入らないので、百姓が見ると水口に大石があつて水の邪魔をしている。百姓が「石を取ってくれば娘をやる」というと鬼が出てきて石を取り除いてくれる。末娘が鬼の嫁に行く。父親が

娘を訪ねて行き、鬼と縄ない競争、石食い競争をする。その都度娘が計略を立てて父親が勝ち、二人で五百里車で逃げる。鬼は千里車で追いかけてきて、川の水を飲んで二人を吸い寄せ、娘は尻を出してへらでたたく。鬼は笑い、水を吐き出す。後半は「妻女奪還」と同じになっているが、冒頭で、田んぼの水を支配しているところが注目になる。「猿婿入り」「蛇婿入り」の冒頭と同じなのである。

娘をさらう

鬼が山に住んでいる話もある。岩手県の「妻女奪還」では、山に住む鬼が娘をさらっていく。村人たちが鬼の家へ行き、大勢の鬼たちに酒を飲ませて、酔ったときに槌で鬼を殺し、娘を助けて逃げる。鬼の大将が家の煙出しから逃げ出し、娘を取り返しに行くが、家に魔よけがあつて入れなかつたという。娘をさらう鬼は山に住んでいるのが常である。

昔ばなしの鬼は、伝説の鬼と異なり、話の最後では常に人間に負けている。民衆のファンタジーが鬼を飲み込んだ観がある。



仮面(鬼)
標本番号 H0013456



仮面(老鬼)
標本番号 H0013464

鬼神の哀しさ

松崎遼子 啓明大学専任講師

韓国では幽霊・妖怪・精霊・鬼の

ようなものを呼ぶときに「鬼神」ということばをよく使う。大学生に有名な鬼神について聞いてみると、未婚のまま死んだ女の霊である「処女鬼神」や男の「モンダル鬼神」、山に住む小鬼「トッケビ」、溺死者の霊である「水殺鬼」、むかし、便所を建てる際に卵を埋めた風習に由来するという「タルギヤル鬼神(卵鬼神)」、そして、最近テレビドラマによって知名度を上げている「九尾の狐」などが出てきた。これらの鬼神は、人を驚かせたり、人に憑いたり、ひどいときには殺してしまったりする。しかし、そんな鬼神も、悪さをするのを目的に存在しているわけではないようだ。

鬼神とシャーマン

韓国で鬼神とのつきあい方を一番心得ているのは、シャーマンたちだろう。科学的に説明できない問題、たとえば病院に行っても病気が治らない、家族に不幸が続いた、はたまた娘がいつまでも結婚できないなど、大小さまざまな気がかりをシャーマンに相談する人が一定数いる。鬼神が原因とされた場合、刀や火や霊符で追い払うこともあるが、シャーマンに憑依させて思いを語らせ慰めたり、食事や歌舞でもてなしたりしてお引き取り願うことも多い。これは、祖先や神に福を祈るときと同じ方法である。儀礼によって慰撫された鬼神は、善神に変わることもさえる。祖霊も神も鬼も元は同じ「魂」だから、そういうことが起こるのだ。

三つの魂

韓国には、人は三つの魂をもっているという考え方があり。人が死ぬと、肉体を抜けた魂のひとつは、天へ向かう。そこで「祖霊」となった魂は、より上位の「大神」になる



雑鬼神を供養するための簡易祭壇

ための修行をするのだという。もうひとつは地に潜り、妊婦の腹のように盛り上がった墓のなかで再生の準備をする。最後のひとつは、未練や欲心が満たされない限りどこにも行けず、生者の世界に留まる。この魂は「結婚したい」「水から引き上げてほしい」「お腹がすいた」など、生きていくときにもついていた欲心に基づいて活動する。それがたまたま生者にとって害となるときに、「鬼神」とよばれてしまうのだ。

怖くない

一般の人びとのあいだでも、理論はともかく鬼神の哀しさは理解されている。いまどきの大学生も、ひとしきり怪談を語ったあと、こんな風につけ加えた。「鬼神って、悪いことをしたいわけじゃないんです。ただ、生きていく人とは『氣』が合わないから悪いことが起きてしまうだけ。ある意味、可哀想なんです。」

「僕は、鬼神は怖くないです。だって、僕も死んだら鬼神になるかもしれないですから。」



死病消滅符。下の文字は、鬼神が泣いている形



水殺鬼を引き上げるため、川に入るシャーマン

鬼子母神と神義論

杉本良男 民博民族社会研究部

鬼子母神はもともとインドに起原をもつ仏教神のひとつとして日本に入ってきた。サンスクリット名ハーリーデー（Hārī），これを音写した訶梨帝母ともいう。釈尊仏陀にしたがわれない夜叉（Yakṣa）の王、毘沙門天（Kubera）配下の般闍迦（散支半支迦 Pañcika）の妻とされ、みずから五〇〇人の子どもをもっていたが（千人説、一万人説もある）、ほかの子どもをとって食べる食人鬼であった。

仏法への帰依と信仰のはじまり

釈尊仏陀は訶梨帝母がもつとも愛した末子愛奴兒（Angana）を大きな面桶の下に隠して子どもを失う母親の苦しみ悲しみを悟らせた。仏法に帰依した訶梨帝母は中央アジア、中国、日本など北方仏教圏で子どもや妊婦の守護神となった。

訶梨帝母または鬼子母神への信仰の早い形態は、北西インドから中央アジアにかけて一世紀から五世紀ごろに最盛期を迎えたガンダーラ仏教美術のなかにみられ、これはギリシ

アの女神タイケ（Tyche）と融合した信仰ともいわれている。ただインドのヴェーダ文献やブラーナ文献などの古層にこの女神への信仰の痕跡を見つけることはできず、その起原を特定するのは困難である。

我らを悪より救い給え

仏教の伝統のなかで、釈尊仏陀に従うか反抗するかは、その善悪を判断するいわゆる神義論にとって決定的な意味がある。この訶梨帝母のように、釈尊仏陀に従わなかったときには鬼、夜叉とさげすまれ、これに従うようになると一転して神、神祇の列に加えられるというのは仏教の伝統のなかではそれほど珍しいことではない。

スリランカの仏教は、日本と同様に神仏習合が行われており、釈尊仏陀を最高位にいたたく神霊の体系パントオンが形成されている。仏陀に近い座にはこれを守護する四方神はじめ人びとに善をなす諸神がおり、その下には中小の神々があり、さらに釈尊仏陀にしたがわな



鬼子母神（ハーリーデー）
ガンダーラ ラホール博物館所蔵
（撮影・大村次郷）

鬼、夜叉のたぐいが最下位に置かれる。その構造は現在のような仏教の形態が確立した一八世紀後半の王国の統治形態の投影だと考えられている。

この神霊の体系のなかでは、ある名称をもった超自然的存在が、あるときには神、神祇として祀られ、あるときには鬼、夜叉として排除されることがある。中央高地の村落部でよくおこなわれていた悪魔払い、同じフーニヤン（Hunyan）という名前をもちながら、フーニヤン（神）がフーニヤン（鬼）を退治するストーリーになっている。ここで神と鬼をわけるのは、ひとえに釈尊仏陀に従

うかどうかにかかっている。

このような善悪交代可能な神義論はキリスト教のそれとは対照的である。キリスト教の悪（evil）は基本的に改心したり善なる存在に変わることはない絶対悪である。悪への徹底的な不寛容に対するアジア的寛容の精神は、再評価されてしかるべきであろう。

ルーマニアのなまはげ

新免光比呂 民博民族文化研究部

いずこの土地にも、巡り来る季節にともなう行事がある。それは心ときめく訪れであったり、恐ろしい形相の存在のあらわれであったりする。ルーマニアでも一二月には、ま

ず心楽しい聖ニコラス（すなわちサンタクロース、ただし訪れるのは一二月二四日の夜ではなく一二月六日である）の訪れがある。しかし、一二月も押し詰まってくる

と鬼があらわれる。もちろん、ところ変われば品も変わり、日本のように鬼だけがあらわれるわけではない。そこはキリスト教の土地柄である。鬼を退治する存在がともなっている。そして鬼は人の世界から追い払われてしまう。

夕べの寒さのなかで

この演劇的な行事のことをピフライムという。もともとはキリスト教の宗教劇と民間の信仰が合体したものである。一二月ともなれば、ルーマニア（おそらくは北西部マラムレシュ地方と北東部のモルドバ地方だけであろうが）の各村で、この行事

がおこなわれる。

参加者たちのなかには、恐ろしい仮面をかぶり、油を抜いていない荒い羊毛を用いた衣装を身につけたり、軍服のような服を身につけたりする者がいる。数人で村の中心の路上に出て、荒々しく振舞う。鞭で鋭い音をたてる者もいて盛り上げる。それを村人たちが取り囲んで見物する。

マラムレシュの一二月の日照時間は短い。はやばやと日が落ちて凍えるような夕べの寒さのなかで、参加者も見物人も特産の蒸留酒ツイカ（果樹を木の蒸留所でアルコールにしたもの）を一気にあおる。冷えた身体は温まり、舌もなめらかに掛け声がとぶ。

この行事は、おそらく季節の変り目にもなっておこなわれる予祝儀礼の一種であろう。最初に述べたが、日本でも暮れには悪い子はいないかと子どもたちを追うなまはげの習慣がある。また、豆まきのように

中国伝来かもしれない春を待つ行事もある。

一条の光

ルーマニアの冬は長い。とくにマラムレシュでは、八月一五日の生神女就寝祭（聖母被昇天）が終われば秋が訪れる。そして一〇月には初雪も見られる。雪に埋もれた村の生活のなかで、ピフライムは一条の光が暗闇のなかに差し込むような出来事であろう。人は光を求めて闇のなかを歩む。季節に埋め込まれた行事は、観光客相手に作り上げた見世物ではなく、人が生きるために創造したものだ。



恐ろしい仮面たち。だが、それを身に着けた若者たちは底抜けに明るい。（9ページ写真上下とも）





民博東京講演会 「世界の結婚事情——セネガル、中国、フランスから考える」

のばやし あつし
野林 厚志

民博 研究戦略センター

本館は2000年から毎年秋に日本経済新聞社と共催で東京講演会を開催している。
11回目を迎えた今回は、人類学や民族学において古くから大切なテーマとなつてきた結婚をとりあげた。

結婚をめぐる人類学の議論

世界にはさまざまな結婚の形態があり、配偶者選びや結婚をおして築かれる親族関係や社会関係は非常に多種多様であることが知られている。人類学者はこうした社会関係の基盤となる結婚とそれに関連した人間関係について調査、研究をおこない、さまざまな議論を重ねてきた。とりわけ一九五〇～六〇年代にかけて、兄弟姉妹の子のあいだでおこなわれるいわゆるイトコ婚をめぐる、社会の構造の存続という観点から説明した著名な人類学者であるレヴィ・ストロースと、個人の感情や嗜好といった観点から解釈したハーバード大学の社会学者であったホーマンズとのあいだで熱い議論が戦わされたのはそれらの例のひとつである。配偶者が死んだ場合、残された片方の配偶者と死んだ配偶者の兄弟姉妹とのあいだでおこなわれるレヴィレイト婚（もしくはソロレイト婚）、未婚のまま死んだ女性と男性とが婚姻関係をもつ位牌婚など、非常に多種多様な結婚のありかたを人類学者たちはこぞつて記述、分析してきた。

結婚の再認識

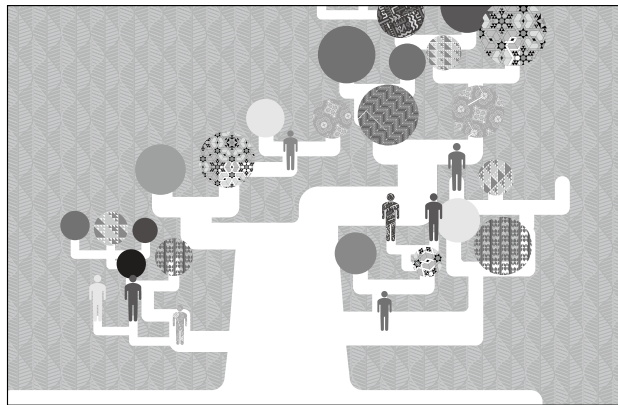
しかしながら、人類学者の関心は民族誌記述の方法論的な問題や、グローバル化の影響、現地で生じている開発や経済格差にかかわる現実的な問題に関心を強めていき、



中国福建省の漁村の若い夫婦。「不落夫家」の慣習は「長住娘家」ともよばれる。夫婦は結婚後、第一子誕生までは同居しないことが多い(提供・田村克己)

三つの切り口から

今回の講演会では、こうした背景のもと、世代や人口、子の存在、制度という三つの切り口から結婚を考えた。民博の三島准教授はセネガルでおこなわれている一夫多妻制のからくりを世代をこえた婚姻関係による結婚人口の調整であることを解き明かした。事情により塚田教授に代わって急きょ登壇した田村教授は自身の調査地である福建省漢族や、塚田教授の調査してきたチワン族の、子の出生をもって正式な夫婦関係となる「不落夫家」という慣習を具体的な調査事例をもとに解説した。東北大学法学



家系図を示す絵(研究フォーラムのポスターより)。パオバブの木をイメージしており、模様の一部にアフリカの布のデザインが使われている。©遊文舎

部の水野紀子教授には、家族法の成立過程とその概念を中心に、日本とフランスとのあいだの結婚観や社会観の相違について講演いただいた。時間的な制約から、研究のほんの一端についてだけしか紹介していただけだったが、それぞれのも味を活かした講演は「晩婚化」や「婚活」といったマスコミがとりあげがちな表現だけでは理解できない、結婚の歴史性や政治性、経済性や社会性を強く意識させる内容であった。今回の講演会の聴衆は若い世代の割合が高く、「今、ここで」という人類学ならではのありかたを、当事者意識をもった人たちに少なからず伝えることができたのではなかろうか。

梅棹忠夫の予見

パネルディスカッションでは、七月に他界した梅棹忠夫初代館長が約五〇年前に「婦人公論」によせた「妻無用論」をてがかりに、講演者に講演内容を今一度ふりかえってもらった。「今後の結婚生活というのは、社会的に同質化した男と女との共同生活、というようなところに、しだいに接近してゆくのではないだろうか。」レヴィ・ストロースらが慣習的な結婚慣習のことを議論の中心にしていた同時代に、すでに将来の結婚というものを予見していた「妻無用論」のなかの梅棹先生のこのことばは

結婚というテーマは研究上の主要な地位から徐々に遠ざかっていった。民博でも婚装、婚資品といった標本資料は収集されたり展示されたりしているが、それらを調査の中心に据える研究者はそれほど多くはない。一方で、この数年、「家」、「ライフデザイン」、「生き方」といったキーワードが民博でおこなわれる研究の課題名に登場する機会が増えてきた。こうしたキーワードには結婚という課題が密接に関係する。とりわけ、少子高齢化、晩婚化が進む日本において、結婚はこれからの社会がどのような方向に進んでいくのかを占う重要なテーマとして再認識する必要があるだろう。

慧眼であろう。個別的な社会現象に限定するのではなく、将来を見とおした文明的な視点が結婚という人類学上の課題にも与えられていたのである。

晩婚化や平均初婚年齢の男女差の縮小、生涯独身者の増加、正式な結婚の形をとらず「パートナー」とよびあうカップルが増加していることなど、結婚をめぐるさまざまな変化は二一世紀の家族像や社会関係、社会そのもののありかた、さらには地域や国家、そして地球全体の人口構成にも少なからぬ影響を与えていくことはいまでもない。今回の講演会は結婚というテーマが人類学における大切なテーマでありつづけることを確信させるよい機会となったのではなかろうか。

【講演会情報】

二〇一〇年一〇月二十九日に東京都千代田区の日経ホールにおいて公開講演会「世界の結婚事情——セネガル、中国、フランスから考える」を開催。講演は本館三島准教授「男女フランスからみた結婚事情」セネガルの女性たちと大家族の戦略」ならびに田村克己教授「子の出生の意味するもの——中国社(チワン)族の婚姻習俗「不落夫家」婚をめぐる」東北大学法学部水野紀子教授「結婚の制度を比較する——日本とフランスの例を中心」。

「春のみんなくフォーラム2011」
「ことばの世界へ」
会期 開催中～3月31日(木)

◆関連イベント

◆公開講座
「ことばで世界一周」
世界各地のちよつとめずらしいことばの入門講座。1月18日現在、以下の言語が受付中です。(最新の受付状況についてはホームページをご確認ください)
「イスラマ語」2月12日(土)
「日本語」2月20日(日)
「ポントック語」3月5日(土)
「シンハラ語」3月26日(土)
「フィジー語」3月27日(日)
時間 13時～14時30分
定員 各講座30名(高校生以上の方対象。定員に達し次第、しめぎります)
※参加無料、要申込(詳細はホームページ)
◆展示場クイズ
「みんなのことは編」
期間 2月1日(火)～2月28日(月)
場所 言語展示場
※要観覧料、申込不要
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 06・6878・8210

◆公開講演会
「ことばの類型と多様性」
実施日 2月19日(土)
時間 13時～17時
会場 有楽町朝日ホール
定員 600名(先着申込順)
※参加無料、要申込
申込方法
「第14回公開講演会・シンポジウム参加希望」と明記の上、氏名、郵便番号、住所、電話番号、今後の講演会などのご案内送付希望の有無を記載し、左記までFAXにてご連絡ください。
FAX 06・6878・8479
お問い合わせ
研究協力課共同利用係
電話 06・6878・8331

◆特別講演

「こみたらう ことばをかたる」
ことばで絵の世界を表現してこられた絵本作家五味太郎さんにそのゆたかな言語観をこぼして描いていただきます。
実施日 3月6日(日)
時間 15時～16時30分(開場14時30分)
場所 講堂
定員 450名
※参加無料、申込不要(先着順)
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 06・6878・8210

支援の現場を比較検討し、グローバルな支援について考えます。
実施日 2月27日(日)
時間 10時～12時(第4セミナー室)
13時30分～17時(講堂)
※参加無料、申込不要
お問い合わせは左記メールアドレスにお送りください。
stateless2011@dc.minipaku.ac.jp

◆国際シンポジウム

「日常」を構築する——アフリカにおける平和構築実践に学ぶ」
紛争後社会に生きる人びとが、かつての敵、難民・避難民や援助実務者といった多様な他者と新しい「日常」を創出する実践について考えます。
日時 ①3月5日(土) 13時～17時(講堂)
②3月6日(日) 10時～17時5分
(第4セミナー室)
※参加無料、申込不要
お問い合わせは左記メールアドレスにお送りください。
suzuki.c@dc.minipaku.ac.jp

◆みんなく公開講演会

「自然と向きあう人びとのいま——太平洋とアフリカに見る」
人はこれまで自然とどう向き合ってきたのか。人と自然の関係は、これからどうなっていくのか。この講演会では、人が自然とのやりとりを用いる呪術や伝統医療に着目し、太平洋とアフリカの人々の日常実践を紹介し、現代社会における意味を考えたい。
実施日 3月18日(金)
時間 18時30分～20時30分(開場17時30分)
会場 オールホール(大阪 梅田毎日新聞社ビル地下1階)
定員 400名(先着申込順)
※参加無料、要申込、手話通訳あり
申込方法
「公開講演会参加」と明記の上、氏名、郵便番号、住所、電話番号、今後の講演会などの案内送付希望の有無を書いて、ハガキ、FAX、メールにて左記「研究協力係」までお申し込みください。
FAX 06・6878・8479

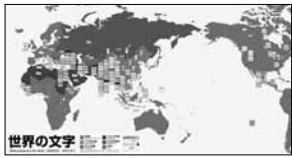
◆公開ダンスワークショップ
「インド刺繍×思いと出会う 願いでつながる」
インド西部の刺繍との出会いをもとに、ダンス表現を創り発表するワークショップです。
日時 3月19日(土) 13時～17時
3月20日(日) 10時～15時
場所 第5セミナー室、第7セミナー室など
※要申込(見学は自由です。詳細はホームページ)
お問い合わせ
情報企画課展示グループ
電話 06・6878・8532

◆アメリカ展示・オセアニア展示の閉鎖

新しく生まれ変わるアメリカ・オセアニア展示場に之期待ください。
閉鎖期間 3月16日まで(予定)
※お問い合わせの受付時間は平日9時から17時です。

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)
第393回 2月19日(土)
「新言語展示関連」
日本の文字・世界の文字
講師 八杉佳穂(民族文化研究部教授)



日本の文字は、漢字と仮名を交えて使うところからか、特殊で、むしろかしい文字といわれています。本当にそうでしょうか。世界の文字を比べながら、文字の本質とは何か、日本の文字の特徴は何かを考えてみましょう。



第394回 3月19日(土)
「特別展」ウメサオタタ才展「関連」
みんなく誕生
講師 佐々木高明(民博名誉教授)
聞き手 小長谷有紀(民族社会研究部教授)

みんなく初代館長・梅棹忠夫先生の軌跡をたどり、その思想の先見性や行為の実効性を再発見する特別展を開催します。この展示にちなんで、二代目館長・佐々木高明先生をお招きし、創設前夜についてお話をうかがいながら、私たちに託された未来を考えます。

友の会

国立民族学博物館友の会 電話06-6877-8893(平日9時～17時) FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)
第392回 2月5日(土) 14時～15時30分
日本におけるチベット研究のはじまり
青木文教のたどった道
講師 長野泰彦(民族文化研究部教授)
第393回 3月5日(土) 14時～15時30分
ジャワの芸能にみるマハーバーラタ
講師 福岡正太(文化資源研究センター准教授)
古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」は、王位をめぐる争つ一族の物語です。インドネシア・ジャワ島にも伝わり、多くの芸能の題材となりました。ジャワ芸能は、登場人物の愛憎や喜怒哀楽をどのように描いているのでしょうか。ヒデオなどを用いてご紹介いたします。
東京講演会
第96回 3月26日(土) 14時～15時30分
「特別展」ウメサオタタ才展「関連」
梅棹忠夫 語るの背景
講師 小山修三(吹田市立博物館館長、民博名誉教授)
会場 埼玉大学東京ステーションホール
定員 80名(要申込)
第97回 4月30日(土) 14時～15時
「特別展」ウメサオタタ才展「関連」
梅棹忠夫の人となり
講師 石毛直道(民博名誉教授)
会場 東京都中小企業会館講堂(銀座)
定員 100名(要申込)

第78回民族学研修の旅

遥なるビザンツ文明の現在
民族と宗教のモザイクの歴史をひもとく
5月12日(木)～25日(水) 14日間
ブルガリア、マケドニア、ギリシャ、トルコなど多文化が共存してきた歴史をたどります。
※詳細は上記「友の会」までお問い合わせください。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

一年で一番寒い季節になりました。

雪の降る日はあたたかい家の中で、ほっこりティータイムを楽しんではいかがでしょう。ミュージアム・ショップでは、スリランカのセイロン、インドのダーズリン、タンザニアのアフリカンフライドなど、おいしい紅茶をとりそろえています。あたたかいミルクティーだけでなく、スパイスの効いたチャイミックスでもお楽しみいただけます。



スリランカのセイロン(225g) 1,470円
インドのダーズリン(40g) 950円～
タンザニアのアフリカンブレンド(100g) 525円～
スパイスチャイミックス(10g) 315円

鉱山跡に立ちあらわれた鬼の殿堂 日本の鬼の交流博物館

くぼまさとし
久保正敏 民博文化資源研究センター



正面

この博物館が由良川の支流を遡上した大江町の山中に設立されたのには訳がある。ここは、京都府随一を誇る銅鉱山だった。最盛期には一〇〇〇人の暮らす町だったが、採算が合わなくなり一九七三年にすべて撤去された。丹波地域にあった多くの鉱山が外国産に押され衰退した歴史は、日本の鉱業に共通する。

町おこしのふたつの柱

そこで大江町は、伝説を生かした町おこしを模索し、特集にも登場の村上政市氏を中心に、一九八二年に

大江山酒吞童子祭を開催、当地を「酒吞童子の里」と命名した。もうひとつの柱が鬼瓦。一九八八年、「日本の鬼瓦を保存する会」が発足し、「全国鬼師（鬼瓦製作者）の集い」も開催された。一九九三年の開館時に正面に置かれた高さ五メートルの「平成の大鬼」瓦は、「日本鬼師の会」面々が製作した一三〇のパーツからなり、鬼師団結の象徴だ。

鬼のイメージさまざま

館内はほとんどが露出展示、鬼に関する伝承、仮面、絵巻ともに古今の鬼瓦が時代順に展示され、不定形の鬼のイメージが時代とともに定形化していく様子が面白い。というのも、オニの語源隠（オヌ）は、元来姿の見えないものだったはず、と塩見行雄館長は語る。特別展・企画展も開館翌年から毎年開催し、強い、可哀想、かわいいなどさまざまイメージの絵画や造形作品が展示され、その後博物館に寄贈されて、資料が増えていくという。

鬼研究のメッカ

酒吞童子は謡曲や御伽草紙、浄

瑠璃や歌舞伎、国定教科書や小学唱歌、映画で知られたテーマだが、その根底には、中央権力に抵抗する者などを異界へ押し込める意図があった。そうした善悪二分法では捉えられない鬼のイメージを、民間伝承や民俗芸能も含めて描き出す鬼の殿堂がここ。開館翌年には、人類が鬼に託してきたユーモアとペーソスにふれつつ文化の深層を考える「世界鬼学会」もこの博物館を事務局として設立、毎年秋には芸術家も交えたシンポジウムを開催するなど、鬼研究のメッカでもある。小振りながら懐はじつに深い。



鬼瓦の変遷



老若も集まる鬼の殿堂

みんぱく 私の逸品 東北の蓑と前衛のデザイン

標本番号 H0029920
地域 日本新潟県
受入年 1975年

ポルドー第3大学准教授
民博 外来研究員

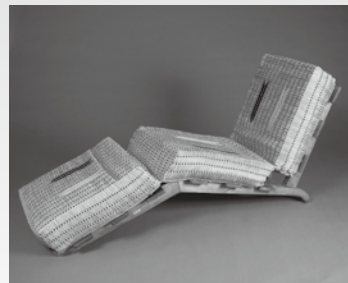
アンヌ・ゴツ

かつて東北地方で使われていたこの蓑かさの造形美はわたしを夢想の世界に誘う。波打つ稲わらの奥深い黄金色こがねは北国の凍てつく雪に映え、人を温かくつつみこむ。ゆさゆさと揺らぐ蓑わらそのものの量感、襟部分の緻密な編み目、その合間に点在する藍と白の紐ひもがなす細かな文様、これらが繊細かつ力強い旋律を生み出す。まるでときを超えた永遠の命が宿っているかのようなこの古い外衣にわたしは心を奪われ、雪深い北国に思いをはせる。

わたしは、日本人の日常生活に椅子がどのように導入されたかというテーマを通して、日本の物質文化における近代化を研究するフランス人女性で前衛デザイナーのシャルロット・ペリアン（一九〇三—一九九九）が戦前に設計した寝椅子である。米俵や蓑の編みの技術を応用したカバーで覆われた三つ折りクッションは、一九四〇年から一九四一年の冬に東北の農民との協力によって制作されたものである。和風住宅にも溶け込むように、前衛的な要素と日本の伝統を巧みに調和させた彼女の作品は大きな反響を呼んだ。

近代建築の巨匠ル・コルビュジエの右腕であったペリアンは、一九四〇年に輸出工芸を近代化するための指導者として日本の商工省に招へいされ、産業デザイナーや民芸運動の担い手たちと交流した。当時、民芸運動家たちは疲弊した東北地方を復興させる手段として、副業となる工芸制作の普及に力を入れていた。この動きに共感したペリアンは、翌年の農作業に備えるための冬場の「藁仕事」の技術や芸術性に惹かれ、俵や蓑の匠たくみを調度品のデザイナーに生かせないかと考えた。この構想から生まれたくだんの寝椅子は、一九四一年に商工省貿易局後援のもと、ペリアンの創作作品展覧会「選択伝統 創造」に展示され、工芸史上に残る彼女の金字塔のひとつとなった。

雪国の古蓑が秘める美の源泉は、次世代のペリアンに再び見出されるのを、博物館の片隅で静かにまっている。（山中由里子訳）



シャルロット・ペリアン「折りたたみ式寝台」
（山形県立博物館 所蔵）

古民家という宇宙

すぎむら かずひこ
杉村和彦
福井県立大学学術教養センター長

北陸の中山間地、とりわけ、限界集落といわれるような地域の周辺には古民家が点在する。雪深い北陸の風土のなかで育まれた、がつしりとした作りの古民家のなかに置かれた表具、障子、囲炉裏のどれにも、日本文化の粋が集められている。埋もれた宝、いまだ語られざる小さな「博物館」たちが、今や捨てられようとしている。こうした古民家を現代にどう生かそうか考えながら歩いてみた。



今立のロングステイプロジェクト

「今立いまだて古民家・匠・ロングステイプロジェクト」が、二〇〇四年に福井県の地域ブランドを創造するための事業のひとつとして発足した。これは、古民家にロングステイしながら、今立（現越前市）の歴史、工芸、芸術、農業、林業などの地域資源が学習できる、ひとつのエコ・グリーンツーリズムの活動であった。プロジェクトが終了した後も、その母体となったNPO森のエネルギーフォーラムの「遊作塾」という活動として続けられている。この事業には、日本有数の腕をもつ宮大工や越前和紙の人間国宝までが参加している。伝統に裏打ちされ、引き継がれてきた匠の技を生かしながら今立の住民が生き生きと活動できる場を創造することを目指しているためだ。

地域のコスモス

今も続く過疎化のなかで捨てられようとしている古民家。古民家には、これまで生きてきた人たちの思いが立ち込める。柱の傷のひとつひとつに、床板の割れ目に思い出がこもる。地域の素材を取り込んだ古民家では、住居としての空間の使い方にも、村社会の姿が刻まれている。住まう人によって、常にその生活に適合するように作り変えられてきたからである。古民家それぞれが、地域の資源に支えられ、地域の多彩な技、地域の生活が凝集されたひとつのコスモス（宇宙）だ。

プロジェクトの活動は、われわれの日常に「手作り」世界を取り戻す試みでもあった。というのは、活動の舞台である「古民家」そのものが手作りによって支え続けられているからだ。古民家のモノたちには、匠の技のエッセンスがちりばめられ、モノ作りを支えた小さな道具は、さらにそれを作るモノ作りの技に支えられている。古民家が崩れていくとき、モノ作りのコスモスが根こそぎ失われていく。

「遊作」というコンセプト

プロジェクトの推進を通じて生まれてきたコンセプトに、「遊作」がある。手作りを軸としたモノ作りは今日、田舎志向の人にとって重要なことだ。しかしあまり生真面目なモノ作りでは都会から来る若い人たちにアピールすることができないだろう。都市の人たちが田舎に楽しさやくつろぎを求めて来るのなら、そうしたことに応えられるコンセプトが必要である。そのためには、匠たちにも、自分たちの世界のなかだけに立てこもるのではなく、そこから踏み出して胸襟を取り払って若者とも交わり、現代にふさわしい何かを作り出していく自由な「場」が必要だ。そこが「遊作」である。活動を繰り返すなかで、「匠と遊び、匠も遊ぶ」というような「遊作塾」の原風景が、実行委員のメンバーのなかで共有されるようになって来た。遊作塾を支える視点は、「古民家を守る」というより、それにあらたにいのちを吹き込み、あえていえば現代社会のなかで古民家を再創造していくという視点であり、古民家から現代を見つめ直すことであった。

二世紀の「田舎」の創造

地域には数知れない本物の匠たちがいる。その方々は優れた技の伝達者であると同時に一人の地域社会の住民として、地域の再生を願い、未来を見据えている。古民家を現代に生かす試みは、こうした匠たちとのコラボレーションをとおして二世紀の「田舎」を創造することだ。今日、地方を繰り返し訪ねてくる都会人が多くなってきた。都会の博物館の展示のなかに、いわば田舎の「伝統」を訪ねる人も多くなるように思う。いまだ語られざる田舎の小さな「博物館」と、田舎を求めて都会の博物館に集う人をつなぎ、新しい地域文化を創出していく道はないのか。古民家を訪ね歩きながら、ふと考えた。



参加者と宮大工の棟梁直井氏（右）の木取り作業

釘隠しが床柱に打ちつけられている



NPOの拠点施設である古民家



囲炉裏に火を入れ完成を共に祝った



1階天井部分が2階の厨子（ツシ）部分にあたる

設立当初、大阪府内三三を教えた民族学級がその後、朝鮮学校の再開などにより衰退の一途をたどるなか、一九七〇年代、同和教育や朝鮮人教育、「本名を呼び名乗る」運動にかかわってきた教職員たちや教職員運動によって、あらたな民族学級が府内各地の学校に作られはじめた。現在大阪府内一〇五校、東大阪市二九校をはじめとして、府内一八〇校に設置され三〇〇〇人近い韓国・朝鮮にルーツのある子どもたちが学んでいる。

この二〇年余りのあいだに、大阪市生野区では七〇年代、小学校の四校ほどにしかなかった民族学級が今日では一六校に拡大し、設置していないのはわずか三校だけになった。それほどまでに拡がった最大の原動力は民族講師や保護者たちの力であり願ひである。そこには、かつて朝鮮人であることをひた隠しにし、社会科の時間、朝鮮というこぼがでるたびに下を向いて、ただ時間が過ぎるのを待っていた自己の姿を重ねてきた彼らの、子どもたちに同じ経験させたくはないという思いがある。その思いや願ひが行政や学校、地域を動かし今日の民族学級設置運動を支えてきたのだ。

民族学級の子どもたち

民族学級は、常勤の民族講師のいる学校ではおもに週に一度学年ごとに実施され、四〜五校をかけたもつ市費嘱託民族講師が配置されている学校では、いくつかの学年をまとめた複式学級でおこなわれていることが多い。

民族学級ではおもに民族のことばと歴史・地理

どもの声に、保護者が「そうか、それじゃやめとくか」と答え、担任もそれに「そうですか」といえば民族学級は成り立たない。それを防ぐことができるのは担任の理解と指導、保護者の支援しかない。また本名原則も大阪府では教育指針に記載されて四〇年近くたっているが、いまだ子どもたちの二割にも至っていない。同一性を求める日本社会の圧力を感じずにはいられない。

民族学級をとりまく変化

民族学級にも確実に変化の波が押し寄せている。少子化と韓国・朝鮮籍者の顕著な減少である。大阪では一〇年毎に半減し、そのスピードを増している。北鶴橋小学校では民族学級で学ぶ児童の八割が朝鮮半島にルーツをもつ日本国籍者であり、在籍者数もこの五年で一〇〇人から六〇人に減っている。当然ウリナラ（我が国）ということばもそぐわなくなっている。子どもたちのルーツが朝鮮半島と日本列島にまたがっていることを前提に教える必要がある。しかし変化を迫られているのは民族学級だけではなく日本の学校全体である。事実さまざまなルーツをもつ日本国籍の子どもたちへの取り組みが求められている。

そのような例として、最近大阪府教育委員会は在日外国人教育の資料集『違いを認め合い共に生きるために』のDVDを作成した。これらの教材を「総合的な学習」に活用すれば人権や国際理解教育に生かすことができる。そして民族講師も総合的な学習の時間や社会科等の授業に積極的に貢献できるだろう。

多文化を
ささえる
人びと

大阪の民族学級 在日の子どもたちとともに歩んだ60年

民族学級ができて60年がたつ。

1948年、第二次世界大戦後やっと実現したばかりの朝鮮人学校が政府により閉鎖され、日本の学校に来ざるをえなかった子どもたちのため、いわば代償として作られたものである。

以降、社会の荒波にもまれながらも、民族学級は在日韓国・朝鮮人の子どもにとって今も重要な役割をはたしている。

カク チョンイ
郭 政義

北鶴橋小学校民族講師

や文化などが教えられている。子どもたちは民族学級に対してどのような思いをもっているのだろうか。昨年卒業した六年生の感想文から拾い出してみる。

〈韓国のことなんて最初はどうでもよかったけど高学年になって歴史のことハングルの事とても興味わいた〉〈民族学級七時間目はやめてほしい〉〈自分の名前を失う創氏改名、自分の名前は大切にしなくてはと思った〉

五月にある入級式、子どもたちの姿は初々しい。焼肉が楽しみなオリニ（子ども）運動会もある。七月には民族学級のプールがあり、六年生の一泊旅行もある。〈みんなでごはんを食べたり泳いだり、民族学級で一番の思い出だ〉

一月には東部子ども民族文化祭があり一二月には発表会がある。〈頑張って練習した両面太鼓、緊張した〉

一月にはウリマルイヤギ（民族語弁論）・カルタ大会に出る。〈一生けん命、発音を覚えてがんばった。これを踏み台にしていきたい〉

そして三月には修了式を迎え一年のサイクルは終わる。行事や活動を節目に子どもたちも成長していく。

一方で最大の課題は子どもたちの出席の維持と本名原則の実現である。

低学年ではチョゴリを着て「朝鮮人に生まれてよかった」といつていた子どもたちも高学年になると辞めたりする子も出てくる。塾や習い事を優先するからだ。

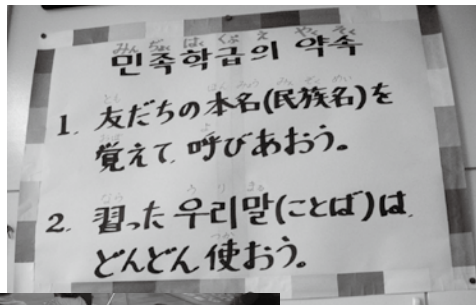
「民族学級おもしろいからやめたいねん」という子

民族学級の意味と価値

民族学級は韓国・朝鮮人のアイデンティティの確立をめざしている。「ゴミ箱にすてていた」韓国・朝鮮を拾い上げ、見つめなおし、少数者として生まれたことの価値を再発見し、「リニューアル」する取り組みでもある。そうしてはじめて他のマイノリティや新渡日者の存在が見えてくる。

子どもたちは、単に日本から朝鮮半島を、朝鮮半島から日本を視ることのできる、両者の架け橋だけでなく、自ら輝くスターになれる存在でもある。民族学級は、多民族多文化社会へ向かう今日、「ちがいの」大切さを提示できる確かな存在でもある。「想定外」の「盲腸」のような存在であった民族学級が六〇年という時代を経た今、公立学校にあらたな問題提起と可能性を示している。〈一週間たったの一時、人より得した一時、これが見える民族学級〉

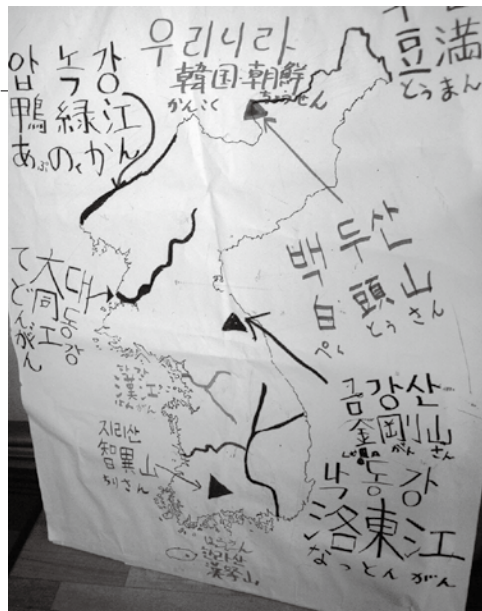
民族学級修了式を終えた6年生と保護者



民族学級の教室に掲示されているポスター



毎年3学期に開かれるウリマルイヤギ・カルタ大会の様子



民族学級入級式での朝鮮半島の紹介場面

中国・壮族の春節

中国広西壮族自治区の壮族の異なる地域で、一九九九年と二〇〇九年に二回、春節を過ごしたことがある。両者の比較を通じて、この一〇年間で何が変わり、何が変わらなかったのかをみることにする。

靖西県と田陽県

一九九九年に過ごした靖西県はベトナムとの国境に近く貧困県として有名であるが、二〇〇九年に過ごした田陽県は右江（珠江の最上流）の河谷平野に開けた穀倉地帯で、現在は稲のほかトマト・四季豆・青瓜などの野菜やマンゴーなど亜熱帯の果物の一大産地として富裕な地域である。旧暦二二月三〇日の除夜に年越しの準備がおこなわれる。県庁所在地の街の市場では、年越しに必要な食材・用品が売られており、購買客で賑わう。生きたニワトリをかごにいられたもの、豚肉、魚（内陸部では淡水魚のティラピアが好まれる）、果物、野菜、そして線香、紙銭、ろうそく、花火、

爆竹など。めでたい文字を対句で書いた春聯の実演販売もある。

肉料理尽くし

靖西では除夜の数日前に農家で豚を一頭殺して、燻製「臘肉」や自家製ソーセージを作った。臘肉とは豚肉の塊を細長く切って数日間塩漬けにし、それをイロリの煙でいぶしたもので、食べるときに切りわけて炒めて食べる。ソーセージは豚の腸に自家製の豚のひき肉をつめたもの。田陽ではそれらを自分で作らずに市場で購入している。しかし、靖西同様、ニワトリやアヒルを数羽殺した。春節は内陸部では肉料理尽くしの御馳走を食べるのである。除夜の夕食には、鶏

肉・ソーセージ・豆腐・春雨・野菜などのたっぷり入った鍋、蒸した鶏肉「白切鶏」、チャーシュー、魚の蒸し籠掛け、アヒルのぶつ切り炒めなどが卓上に所狭しとならぶ。鍋はかつては中央の空洞部分に炭火を入れる形式だったが、今は電熱式だ。まだ農村では度数の低い焼酎が好まれるが、最近では瓶ビールも多く飲まれる。

若者が里帰り

沿海部に出稼ぎに行っていた若者がこのときに里帰りをする。留守を守る老人や小さな子どもで普段はひっそりしている農村がこのときには活気づく。若者は家電や子どもの玩具などの土産をたくさんもって帰省

初一（一月一日）は料理をすることができないとされているので、前日に作りおきをする。初一は家内を掃除することもできないし、理髪、爪切りをはじめハサミ類を使用することもできない。老人に聞き取りをする際に渡さなければならぬ。

変わるくらし

さて、変化したものはビルが並ぶ農村の景観のみだけではない。白黒テレビは大型のカラーテレビになった。冷蔵庫・洗濯機も徐々に普及し始めており、農民もごく普通に携帯電話をもつようになった。乗り物はかつては自転車だったが、今は若者がオートバイを乗りまわす。市場・商店では商品があふれかえっている。少なくとも内陸部でもこの一〇年ほどのあいだで物質的には格段に豊かになったといえる。今のところ、正月の伝統的な行事は大きくは変化していない。しかし、田陽で泊まった家では息子がパソコンをもっていた。一人っ子ゆえ両親は何でも子どもに買い与えているようだ。県庁所在地の街に出るとネットカフェが数軒あり、高校生くらいの若者で満席になる。パソコンのゲームに浸かって学業がおろそかになるケースも最近問題になっている。何ひとつ不由なく育てられたこうした子どもたちが親になるころには正月はどう変化していくのであろうか。



除夜の夕方、供物をそなえ村の廟に詣で人畜の安全や豊作を報告する(田陽県)

ない。調理したニワトリなどの供物がかごやざるに盛って線香を用意して村内の廟に参るのも除夜の風物詩のひとつだ。田陽では観音など仏教系の廟や関帝・伏波など歴史的人物を祀った廟など村によって廟が異なるが、壮族の人びとは廟の種類・神の来歴にこだわらない。靖西では土地廟を祀っていた。祭りに行くのはほとんどが女性で、この点が漢族と異なるようである。廟のほか家の祭壇にも線香を焚いて供物をささげる。夜になると国民的番組ともいえるテレビ番組の『春節聯歡晚会』を見ながら御馳走を食べて一家が団欒をする。一段落すると春聯の貼り替えにとりかかる。正面玄関、裏口、家畜小屋と貼って回る。深夜近くになると連発式の爆竹を玄関の外で放ち、花火を打ち上げる。子どもたちも花火に興じる。一九九〇年代では靖西では木造の高床式住居が主流だったが、二〇〇〇年代に入り、数年間の出稼を経て資金を貯めた若者たちが競うように故郷に二、三階建のビルを建て始めた。ビルの屋上から放つ花火は賑やかで、年々盛大になっている。田陽では花火が終わり日が改まると廟参りに出かける。初詣である。

初二（二月二日）になると嫁いだ娘が里帰りし、親戚の年始訪問が始まる。そのころには街では獅子舞や龍舞が催される。食堂は正月になると店じまいをするので、外から来た我々の

メロンなかまをさがして

田中 克典
たなか かつのり
総合地球環境学研究所プロジェクト研究員

メロンなかまはどこを通ってきたか？

多民族国家から成るラオス、訪れたのは理由がある。筆者は日本で古くから食されてきたマクワ瓜、奈良漬けとして利用されている白瓜、これら二種類の瓜類の由来を研究してきた。学生のころ、マクワ瓜と白瓜を幾つか指導教官から渡され、栽培を始めた。収穫した果実はこと



さまざまな形態を示すマクワ瓜や白瓜。中央下と中央の長い果実が白瓜。他はマクワ瓜のなかま（撮影・加藤謙司）

のほか形態と果実の色が多様であった。これほど多様な果実であるが、驚かされたのは、これらが全てメロンのなかまだということである。メロンといえば、普段、市場で見かけるネットの入ったマスクメロンか、ハネデューメロンを思い出す。メロンは甘い果物だと思っていた。これに対して、マクワ瓜はほのかに甘く、子どものころ、母の実家でのどが渴いたといったときに出されたことを思い出す。白瓜は漬け物に利用するほどであるから、甘くなく、野菜として市場でときおりみかける。これら四つの作物が同じメロンとは思議であるが、ネットメロンやハネデューメロンとマクワ瓜や白瓜とを交雑すると、種子ができて、次の世代も種子ができて、確かに遺伝学的には全てメロンである。さて、マクワ瓜と白瓜、甘さも違い、用途も違うので、さぞDNAを調べたら違いがあるだろうと思った。しかし、これらふたつの作物は、調べた限りにおいてDNAの違いを見つけることができなかった。つまり、マクワ瓜と白瓜は同じ道を辿りながら互いに交雑を繰り返してきた



ルアンナムター県の朝市。畑や野山で収穫した動植物を販売する

たことで、遺伝的にはほぼ同質のメロンなかまが成立したことになる。さらに解析を進めたところ、インド東部のメロンに起源すると結果がでてきた。そこで、実際にインド東部からマクワ瓜と白瓜が伝播してきたであろう地域におい

て、メロンなかまの栽培の実態を探ろうと考え、ラオスまで調査旅行に赴いた。

ラオス北部での調査

ラオスでは世界遺産で登録されているルアンパバーン県、西北部のルアンナムター県、東部のサムヌア県とボンサヴァン県を訪れた。なお、後者二県はベトナム戦争の激戦地でアメリカ軍が投下した大量のナパーム弾の不発弾、破壊された遺跡や、旧共産党軍が宿営した洞穴など、戦争の爪痕が今も残っている。雨期の八月に訪れたところ、メロンが大量に販売されていた。ある地域では中国政府が整備したアスファルトの道路沿いに五〇メートルにわたりメロン



ルアンパバーン県の幹線道路沿いで販売されていた黄色いメロンなかま

なかまが並べられて、母親と子どもがメロンを販売していた。店を構えないで道路沿いで売っている人びとは農家である。彼らは、前日、メロンを収穫しているとのことであった。畑は歩いて三〇分から一時間ほどのところにある山の斜面に作った焼畑である。日本では梅雨の時期にマクワ瓜や白瓜を栽培するが、こちらも栽培状況は似かよっており、感慨深いものがあった。なお、ラオスで販売されていたメロンなかまは、マクワ瓜よりやや大きめであった。



焼畑で野草を収穫するモン族。焼畑には陸稲とさまざまな作物が混作され、野草も生える

情報がえられる現場

さらに驚かされたのはその用途であった。路肩のメロン売りがあるアスファルトの道路は物資の輸送や人の行来のために整備された幹線道路で、長距離移動の人びとがたびたび通る。インタビュウをしていると、バスや車が停まりなから人がヒョコッと顔をのぞかせていた。そのうち、人びとが降りてきて、メロンを二、三個買い始めた。家にもって帰るのかと聞くと、それだけではなく、道中のどが渴いたときやおなかですいたときにメロンを切って食すとのことであった。ナイフ一本あれば種をのぞき切りわけることが出来るので、お手軽な水筒代わりである。日本の高速道路のサービスエリアで水を買うのと同じ要領である。作物が伝播するには人に利用されてもち運ばれる必要があるが、ラ

オスにおいてメロンが受け入れられた背景のひとつに道中の飲み物として利用する習慣があるのかもしれないと思ひ、思わぬところで伝播のヒントをえた。この考えについて、滋賀県守山市の講演で話題に出したところ、幾人かの方から、「わたしらの若いころや今でもやけど、暑くてのどが渴いたときにはメロンを食べる」との声をいただいた。筆者自身も同じ経験をしているので、この意見に得心ゆくものがある。日本へのメロンなかまの伝播と飲み水とのかわりに因果があるとは断定できない。ただ、栽培現場でも講演でも、意見をうかがううえでどちらもフィールドであり調査の一環なのだと思う。なお、本調査は、平成二〇年度ジンパンク事業における海外探索収集調査の一環でおこなわれた。

2月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

6日
(日)

話者：鈴木紀（先端人類科学研究部准教授）

話題：チョコレートが育てる文化

場所：本館展示場内ナビひろば

13日
(日)

話者：長野泰彦（民族文化研究部教授）

話題：【春のみんなくフォーラム2011—ことばの世界へ】関連

居庸関碑文の魅力

場所：言語展示場

20日
(日)

話者：南真木人（研究戦略センター准教授）

話題：増えるネパール料理店の考現学

場所：本館展示入口

27日
(日)

話者：關雄二（研究戦略センター教授）

話題：マチュ・ピチュ発見100周年

場所：本館展示場内ナビひろば

1年間みんなくは何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話)06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00

編集後記

2月と8月と組み合わせて「ニッパチ」とよばれ、景気の悪い季節を指すが、2月の日数が少ないのは、8月の英語名の元となるローマ帝国初代皇帝アウグストゥスが8月の日数を増やす際に差し引かれたためという。うるう年の数字合わせに使われるなど、2月は何だかワリを食った月だ。他方で、「ニハチ」といえば蕎麦を思い出す。

ワリを食うといえば、時節柄の鬼も気の毒な存在だ。超自然、異界の存在は文化の機微を作りだすものだが、境界を乗り越え相対的な見方を促す存在でもある、という視点で鬼を見直そうという特集に合わせ、わたしも「鬼の交流博物館」取材に訪れた。展示から伝承や芸能の奥深さに目を開かれ、境界を越えようとする眼差しが異文化との交流の基本であることをあらためて感じた。

今号は、1977年10月の創刊号から数えて通巻401号の台大に乗った。毎月欠かさず刊行されてきたのは、読者諸賢のご支援、そして歴代の編集に携わった方々や協力いただいた方々の力があつたからに他ならず、深く感謝するとともに、未永く刊行できることを願う。(久保正敏)

●表紙：土鈴（鬼） 標本番号 H0143248 他

次号の予告

特集

梅棹「博情館」を語る

月刊みんなく 2011年2月号

第35巻第2号通巻第401号 2011年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏（編集長） 朝倉敏夫 榎永真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一孝

制作・協力 財団法人千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

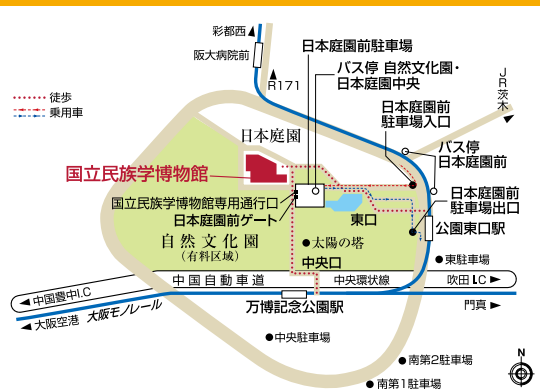
交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

